

# 伝え合う「怖さ」を「楽しさ」にシフト 教室を英語で思考・表現する空間に



英語

## 布村奈緒子先生

両国高校（東京・都立）

教員歴15年。小学生の数年間を父の転勤でイギリスの公立学校で過ごす。大学卒業後、銀行勤務を経てオーストラリアに留学。二度の海外生活で、多様な個性が認められる心地よさや、考えが違っても折り合いをつけていく大切さを実感。子どもたちがお互いを認め合って生き生き過ごせる学校現場を実現したいと思い、教師を志望。

### どんな生徒か

正解がわからないときに  
意見を言い合うのは不慣れ

進学校である両国高校に入学してくる生徒について、布村先生は「勇気がなくて思ったことを言えないことがある」と感じている。自分の思いを英語で言うとなれば、なおさらだ。これまで勉強ができる子とみられてきただけに、間違えることや、言ってみたのに相手に

通じず、理解してもらえないことを恐れている。

また、日本の子どもは全般的に「わかりやすい」「2つの答え」を求めたがる傾向がある」とも感じている。

このままでは、社会で自分の力を発揮しにくいのでは、と布村先生は危ぶむ。最近は海外でも国内でも、「答えのない問題について異なる立場の人と意見を伝え合い、どう折り合いをつけるかを考え続ける」ことが求められていると思うからだ。

### 見方・考え方

英語で伝え合うために  
「流暢」に話すことも意識

だから布村先生は、英語を学ぶ生徒の意識から変えようとしている。

教科書を読み込むのは、授業で指されたときにそつなく答えるためか。いや、教科書の内容からまだ知らなかったことを吸収し、「読んで自分の考えを深める」ことまでしてほしい。

英会話といえば、例文や自作の英文を「音読」すればいいの。そうではなく、即興で練り出した言葉に思いを込めて「相手に伝えよう」として英語を話す。「相手の考えを知りたくて英語を聞く」こともしてほしい。

つまりは英語をただ覚えるのではなく、授業中から実践的に使う。「まわりとコミュニケーションを取って考えを深めるために、英語を使おう」という見方・考え方を、生徒が自然にするようになってほしいのだ。

その意識で英語を使っていけば、英語を見聞きしながら考え事をして、思ったことを即座に英語で伝える、ということに慣れてくる。聞く・読む・話す・書くという4技能を合わせて使いこなす力が高まるわけだ。

しかも「意見を伝え合おう」と思って教科書の題材を学んでいけば、自分とは違う意見をもつ人がたくさんいることも生徒が実感していく。

### 授業デザイン

1 自分の意見に「理由」を添えて  
表現することになじませる

生徒が意見を述べるときは、そう考えた「理由」まで添えることを求めている。そこまで考えると、

①本人の思考が明確になり、②他者との違いも見えてきて、③相手にも伝わりやすくなり、伝え合う楽しさをより体感できるからだ。



2 各自に役割を割りふることで  
議論の中で4技能を使う

議論をするときは「意見を言う役」「進行役」「聞き役」「書記役」などを入れ替わりで担当する場合も。話し合いの中でさまざまな4技能を使う経験を積むことができる。



3 生徒が面白い「問い」を  
単元内容に沿って投げかける

単元学習の締めでは、教科書の内容に沿った「問い」を生徒が話し合う。その問いは、意見を出し合うことを楽しめるように、  
①生徒が自分ごとで考えられる問い  
②比較して考えると面白そうな問い  
③因果関係を考えると面白そうな問い



自分の意見(またはグループで話し合っただけの意見)を、皆の前で発表するときも、準備した英文を読むのではなく即興で話す。うまい言葉が見つからず、なんとか伝えようと全体で表現することもしばしば。



ペアやグループで意見を出し合っ、じっくりと考えたなら、次に、生徒たちはそれぞれに自分の意見を改めて文章にすることにもチャレンジする。文法や語彙の「正確性」は、この段階でフォローしていく。

「その体験から『こんな考え方もあるんだ、皆で伝え合うのって面白いな』、自分とは違う意見をプラスに受け止める力も育んでほしいんですよ」  
布村先生はまた、「この場面で思いを伝えるには英語をどう使えばいいだろう?」という見方・考え方が働くようにもしたいという。  
その視点をもつことで、特に生徒に実感してほしいのが、英語を流暢に使いこなす力の大切さだ。ここですべて「流暢さ」とは、仮に文法や語彙がおぼつかなくても、フリーズすることなく、相手が理解しやすいようにどんどん言葉をつむいでいける力のこと。  
「英語で伝えるときは、論文作成のよ

うに文法や語彙の『正確さ』が重要になる場面もあります。ですが、日常の会話や議論では、間違ってもいいから言ってみて、伝わらなければ言い直すほうが、正確さを気にして寡黙になるより『よっぽど伝わる』ことに気付いてほしいのです」

### 授業デザイン

発言するのも意見を聞くのも「楽しい」と思える空間に

では、どうすればこうした英語の見方・考え方は定着するだろう。

布村先生のコミュニケーション英語の授業は、受け答えすべてを英語で行う。しかし、それだけでは、本気で英語で伝え合うような空間は生まれにくい。

大事にしているのは、英語を使うのが「楽しい」と思える環境にすることだ。生徒が意見を口にするときには、自分の言葉で語ることを求め、文法や語彙の正確性はあえて問わない。生徒の英語表現が間違っていて不明瞭であれば、先生や周囲のほうが「こういうこと?」と英語で聞き返し、意思疎通に努める。そんな授業を半年も続けると、生徒は自分の思いを英語で口にすることを怖がらなくなるそうだ。

普段の授業からさまざまな意見が飛び交い、違いを楽しめるようにする工夫もしている。1、2年生には、教科書の内容を別の言葉で表現する retelling を実施、その際に1〜2文で

自分の意見も付け足すことを求めている。慣れてきた2年生の後半からは、教科書を読んで思ったことを、自由に言い合う時間も増やしていく。

さらに、各単元の授業の締めには、教科書の内容に沿った「問い」について生徒がペアやグループで議論し、じっくりと考える時間も設けている。

「意見を言い合って考えるのって、本当は楽しいことだと思おうのです。今の3年生は思いを伝えたいがために『使えそうな表現を前に見た気がする』と単語帳を懸命にめくり、『あった!』と見つけては嬉しそうに使ったりしています。そうして学んだ語彙は、定着もしやすいですよ」

### 教科ならではの「見方・考え方」が社会でどう生きる?

英語を使うことを楽しめるようになった生徒たちは、より通じ合うために語彙や文法も積極的に学び、受験でも結果を出した。さらに卒業生からは大卒や職場で「英語を使っている」という声も届くようになった。布村先生にはそれが何よりも嬉しい。

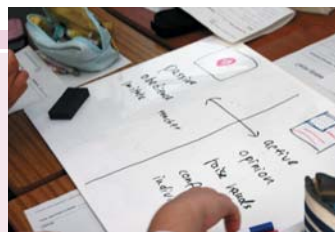
「どんな世界でもいいから、英語を使わなければいけない場面に遭遇したときに、そのチャンスをつかめる人になってほしいんです。生徒にはいつも言っているんです。英語を使っていろいろな世界を見てきて、私にも教えてね、と。そうして皆から教われば、私の幅も広がりますから」



生徒の声「どんな言い方をしても先生が受け入れてくれる、という安心感があるから、自由に意見を言えるんだと思います」

### 4 教師が多様な意見を率先して歓迎する

生徒から想定外の答えが返ってきてても布村先生は「なるほど、想像もしてなかった」と面白がる。英語表現がおかしくて意味が取れなければ、類推してこちらから別の英語表現を投げ返し、理解しようとする。



などを教科書を読んで懸命に考えるそうです。「意見がばらける問い」にすることも重視。

例)スタンフォード大学の創造的な実践にふれた単元のあとで「最近あなたが行った創造的なことは?」「私たちはなぜあまり違った考えをしない?」「日本の教育の利点と欠点は?」「日本の教育はもっと創造性を促すべき?」という問いについて意見を出し合う。